

仁和御集注釈

笹川博司

〔凡例〕

一、本注釈は、冷泉家時雨亭叢書『平安私家集九』（朝日新聞社）所収「仁和御集」を底本とする注釈である。

一、底本の翻字に際しては、次の方針に従った。

(1) 和歌には、それぞれ通し番号を漢数字で付し、適宜、仮名に濁点を付し、意味の切れ目に、空白を置いた。

(2) 詞書は、和歌に対して二字下げとし、適宜、濁点・句読点や「」を付した。

(3) 改行は底本に従い、丁附を「二オ、」二ウ などと示した。オは表の、ウは裏の、略記である。

(4) 解説上、本文を改めた場合は、その箇所に傍点「、」を付し、【語釈】に注記した。

一、注釈にあたっては、【異同】【通釈】【語釈】【他出】【参考】の項目を立て、次の方針に従った。

(1) 【異同】は、次の伝本・古筆切との異同を略号とともに示し

た。なお、宮内庁書陵部蔵「仁和御集」(五〇六・七五)は、底本の忠実な写本である。

(代) 書陵部蔵「代々御集」(五〇一・八四五)所収「仁和御集」

(公) 伝公任筆切 『古筆学大成17私家集二』所収

(西) 伝西行筆切 出光美術館図録『平安の仮名・鎌倉の仮名』所収

(寂) 伝寂然筆切 徳川美術館蔵、古筆手鑑『鳳凰台』所収

(2) 【通釈】は、簡潔で分かりやすい現代語訳となるよう努めた。

(3) 【語釈】は、注意すべき語に限った。取り上げた語句については、できるだけ論拠や用例を示すよう留意した。

(4) 【他出】は、同歌が他の歌集に収められている場合、それを掲出した。

(5) 【参考】は、同歌に関連して参考になる点を記した。

一、書陵部蔵「代々御集」(五〇一・八四五)特有歌二首についても、補1・補2として注釈した。

一、注釈に引用する作品の本文は、次の通りとした。

(1) 和歌は、特に断らない限り、新編国歌大観(角川書店)の本
文に拠った。ただし万葉集は、西本願寺本の訓・旧国歌大観の
番号で示す。

(2) 散文は、特に断らない限り、新日本古典文学大系(岩波書店)
の本文に拠った。

一、本稿は、本大学非常勤講師増田正子氏と共同で行っている平安
私家集研究の成果の一部である。

仁和御集

まだみこにおまし／＼けるに、

わかかなひとにたまふとて

一 きみがため春の、に出て若菜つむ

わがころもでにゆきはふりつ、

【異同】○おまし／＼けるに おはしましけるに(代)おはしまし

けるとき(公)○わかかなひとに わかかな人に(代)ひとに若菜(公)

○きみ 君(代)○春の、春の野(代)はるの、(公)○出てい

で、(代・公)○若菜 わかな(代・公)○わが 我(公)○ゆき

雪(代)○集付 古今(代)古(公)

【通釈】 まだ皇子でいらっしやった時に、

若菜を人にお与えになろうとして

君のため春の野に出て若菜を摘む

私の衣の袖に雪が降りかかることです。

【語釈】○まだみこにおまし／＼けるに まだ皇子でいらっしやっ
た時に。「みこ」の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「け

るに」の「に」は時を示す格助詞。『寛平御集』にも「まだみこに
おまし／＼けるに」(三詞書)とある。「おはしましける」ではなく

「おまし／＼ける」である点が注目される。【参考】参照。○きみが
ため あなたののために：を採ると、私の衣服が濡れてしまった、と

いう定型パターンがある。『万葉集』に「君為 浮沼池 菱採 我
染袖 沾在哉」、「為君 山田之沢 惠具探跡 雪消之水尔 裳
裾所沾」(卷十・一八三九)など。○ころもで 衣服の袖。たもと。

古くから歌語として用いられてきた。『万葉集』に「秋田刈 借廬
平作 吾居者 衣手寒 露置尔家留」(卷十・二二七四)、「妹等里安
之 時者安礼桴毛 和可礼豆波 許呂母弓在牟伎 母能尔曾安里家
流」(卷十五・三五九二)など。袖に雪が降るといふ表現は「わが背

児は 待てど来まさず 天の原 振りさけ見れば ぬば玉の 夜も
ふけにけり さ夜ふけて あらしの吹けば 立ち留まり 待つ吾袖
尔 零雪者 凍り渡りぬ」(卷十三・三三八〇)と見え、現在の訓

によれば傍線部前後は「たちまてる わがころもでに ふるゆきは
こほりわたりぬ」と読まれている。○ゆきはふりつ、「つつ」

は反復・継続を表す接続助詞。歌末の「つつ」には詠嘆もこもる。
絶え間なく：することだ。『万葉集』に「従明日者 春菜將探跡
標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管」(卷八・一四二七、山部赤人

標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管」(卷八・一四二七、山部赤人

標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管」(卷八・一四二七、山部赤人

標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管」(卷八・一四二七、山部赤人

など。

【他出】

○『古今和歌集』春上・二一

仁和のみかど、みこにおましましける時に、

人にわかなたまひける御うた

君がため春ののいいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ

○『新撰和歌』二九

君がため春の野にいいでて若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ

○『古今和歌六帖』一・四五、仁和のみかどの御歌

君がため春の野に出でてわかなつむ我が衣手に雪はふりつつ

○『定家十体』一六一、仁和御製

きみがため春ののいいでてわかなつむ

わがころもでにゆきはふりつつ

○『定家八代抄』春上・一九

みこにおはしける時、

人に若なたまはせける御歌 光孝天皇御製

君がため春の野に出でて若なつむ我が衣手に雪はふりつつ

○『詠歌大概』二

君がため春ののいいでてわかなつむわがころもでに雪はふりつつ

○『秀歌大概』一一

きみがため春の野にいいでてわかなつむ我が衣手に雪は降りつつ

○『百人一首』一五、光孝天皇

君がためはるののいいでてわかなつむわが衣手に雪はふりつつ

○『百人秀歌』一八、光孝天皇御製

君がためはるののいいでてわかなつむ

わがころもでにゆきはふりつつ

【参考】光孝天皇は、仁明天皇第三皇子。皇位から離れた存在であったが、太政大臣藤原基経の廃立により、陽成天皇のあとをうけて元慶八年（八八四）二月二十三日、五十五歳で即位。翌年二月二十一日「仁和」と改元。仁和三年（八八七）八月二十六日、五十八歳で崩御。よって仁和帝と称される。京都の宇多野の小松山に葬られたので小松帝とも。

本歌は【他出】に挙げたように、古今集所収歌で、片桐洋一『古今和歌集全評釈』には「おましましける」の例は他に知らない。俊成の書写した昭和切と、昭和切によった定家の貞応本・伊達本・嘉禄本だけが「おましましける」であり、同じ俊成本でも永暦本・建久本は「おはしましける」であることを思うと、俊成の誤写を定家が踏襲しただけであるかも知れない。とすれば、『続後撰和歌集』賀・一三三七の詞書に、「亭子院くらゐにおましましける時」、同・一三四三「鳥羽院くらゐにおましましける時」とあるのは、この『古今集』定家本の影響ということになる（上・三九六頁）とある。この仮説に従えば、『仁和御集』や『寛平御集』の「まだみこにおましくけるに」も、同様に定家の貞応本・伊達本・嘉禄本『古今集』の影響ということになり、冷泉家時雨亭文庫蔵本『仁和御集』

『寛平御集』が書写された時期を推定する一つの根拠となろう。

因みに、平安時代以前の「おまします」の用例は、俊成が撰者となった『千載和歌集』に「白川院はな御らむじにおましましけるに」(陽明文庫蔵本、春上・四三詞書)、「御子にてをましましける時」(龍門文庫蔵本、賀・六〇六詞書)、正治二年(一一〇〇)八月四日藤原定家書写本を忠実に臨写した古写本『万寿元年(一一二四)高陽院行幸和歌』に「ひのもとのはは木木とたちさかえおましまし」(序文)、『嘉応二年(一一七〇)住吉社歌合』に「神明のかざりなきやそのしまわのほかまでこそまもりおましませ」(廿五番判詞)と見えるくらいで、たしかに、「おまします」は俊成以前にはなかった表現と言えるかもしれない。しかし、中世の歌集になると、俊成・定家の權威によって、具体的には、貞応二年七月本が二条家の証本として古今伝授に用いられて広く流布したために、「おまします」の使用例が五十九例とかなり増加する(新編国歌大観)。そうなると、もう「おまします」という語を「おはします」の誤写とは言えず、辞書類には、「御座します」という漢字を当て、「おほまします」の変化したものと説明するもの(例えば旺文社古語辞典など)も現れてくる。

おりしらず

万代 二 なみだがはなかるゝものゝうきことは

続後 ひとのふちせもしらぬなりけり

「六ウ

【異同】○がは 川(代)○もの 物(代)○ひと 人(代)○ふち

測(代)○けりり(代)○集付 続後(代)

【通釈】 折知らず

涙の川が流れるのは確かにつらいことですが、それ以上につらいのは、恋する相手の愛情の深さが分からないことでした。

【語釈】○おりしらず どのような折に詠まれたか分からない歌。

『相如集』に「をりしらず／たとふるも心あるものをいはばしのひとことぬしはわたらざらなむ」(二四)など。○なみだがは 涙が多く流れることを、川にたとえた語。『古今集』に「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」(恋一・五一一)など。○なかるゝものゝうきことは「流るる」と「泣かるる」を掛ける。

『古今集』に「涙河枕ながるるうきねには夢もさだかに見えずぞありける」(恋一・五二七)など。AとDという二つの事柄を比べ、類似するBとCという二つの状態を挙げ「A BもののCはDなりけり」という形で、AがBであると一応は認めながらも、なおそれ以上にCなのはDであったと気づいて詠嘆する表現。『貫之集』の「夢を見て甲斐なきものわびしきはさむるうつつの恋にざりける」(六五〇)は、恋しい人の夢を見て、その夢から醒めるのも確かに甲斐のないことだが、なおそれ以上にわびしいのは、醒めた現実の恋であったなあ、の意。なお「にざりける」は「にぞありける」に同じ。○ひとのふちせ 恋人の愛情が深いか浅いかということ。『拾

遺和歌集』に「行く水のあわならばこそきえかへり人のふちせを流れても見ぬ」(恋四・八八二)など。

【他出】

○『万代和歌集』宝治二年(一二四八)成立 恋五・二六四三

題不知 仁和御製

なみだがはながるるものうきことは人のふちせもしらぬなりけり

○『続後撰和歌集』建長三年(一二五一)奏覧 恋四・八九六

人にたまはせける 光孝天皇御製

なみだがはながるるみ_をのうきことは人のふちせをしらぬなりけり

【参考】本歌が『続後撰和歌集』に入集した時、第二句「ながるるもの」が「ながるるみ_をの」と本文が替えられた。「み_を」とは、

『万葉集』に「泊瀬川 流水尾之 湍乎早 井提越浪之 音之清久」(卷七・一一〇八)などに見えるように、「湍」「水脈」「水尾」な

どの漢字が当てられる、「水の流れる筋」「船の航行できる深い水路」をいう語で、「淵瀬を知らぬ」ことが支障をきたす点で、文脈

にも適合する。『伊勢集』に「人のながされけるとき/せきとむるなみだいづみにたえせずはながるるみ_をぞとどめざりける」(二九

三)などあり、光孝天皇の時代にも用いられた歌語である。さらに、『後拾遺集』には「おなじころそのみやに侍ける人のもとにつ

かはしける 相摸／とはばやおもひやるだにつゆけきをいかにぞ

きみがそではくちぬや／かへし 大和宣旨／なみだがはながるるみ_をとしらねばやそではかりをば人のとふらん」(哀傷・五四九、五五

○)など見え、「涙川流るるみ_を」という表現も現れ、直接的な「涙川流るるもの」という表現よりも妥当と考えられ、「水脈」と「身_を」の掛詞として「み_を」が選ばれたのであろう。

更衣、さとよりまいりたりける

あした

三 むめのはなちりぬる左右に みえざりし

ひとくとけさはうぐひすぞなく

【異同】○あした 朝に(代)○はな 花(代)○左右 まで(代)

○集付 続古(代)

【通釈】 更衣が里から参内した朝

梅の花が散ってしまうほどに、姿が見えなかつた人がやつて来たとき今朝は鶯が鳴いていることです。

【語釈】○更衣 もと、天皇の着替への御用を勤める後宮の女官であつたが、後には、天皇の妻の呼称となる。納言およびそれ以下の

家柄の出身の女で、地位は女御の下。『後撰集』に「長明のみこの母の更衣、さとに侍りけるにつかはしける 延喜御製／よそののみ

松ははかなき住の江のゆきてさへこそ見まくほしけれ」(恋一・六五三)など。○さと 宮廷を「うち(内裏)」というのに対して、それ

以外の場所をいう。特に宮仕えする人が自分の住居また実家をさしていう。自宅。生家。『万葉集』に「百磯城乃 大官人者 今日毛

をとしらねばやそではかりをば人のとふらん」(哀傷・五四九、五五

鴨カモ 暇ヒトマモナド 無跡ムツ 里尔不去将サトニユカザラム有ル（卷六・一〇二六）など。○左右に

「左右」の訓は「まで」。『万葉集』に「梅花ウメノハナ 枝尔可散登エダニカオノト 見左右ミタビ」

二 風尔乱而カゼニミダレテ 雪曾落久類ユキアヲフリク（卷八・一六四七）など。「までに」は、

「ほどに。事態の及ぶ程度を示す。『万葉集』に「妹が家にへ 雪かも

降ると 弥流麻提尔ミルマテ」ここだもまがふ 梅の花かも」（卷五・八四

四）、『古今集』に「やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふり

けるを見てよめる 坂上これのり／あさほらけありあけの月と見る

までによしののさとにふれるしらゆき」（冬・三三三）など。○ひと

く「人来」と鶯の鳴き声「ヒトク」を掛ける。『古今集』に「梅花

見にこそさつれ鶯の人く人くといとひしもをる」（誹諧歌・一〇二二）

など。

【他出】

○『万代和歌集』春上・二二六

鶯をよませたまける 仁和御製

むめのはなちりぬるまでに見えざりし人くとけさはうぐひすぞなく

○『統古今和歌集』文永二年（一二六五）奏覧 春上・六七

更衣元善、さとよりまゐりたりけるひ 光孝天皇御歌

むめのはなちりぬるまでに見えざりし人くとけさはうぐひすぞなく

【参考】『三代実録』仁和三年（八八七）二月十六日条に「勅以更衣

従五位上藤原朝臣元善為女御。中納言従三位山陰之女也」とあり、

『統古今和歌集』六七番歌詞書「更衣元善」はこの女性に違いない。

仁和三年二月十六日に「女御」となっているので、光孝天皇が本歌

を詠んだのは、光孝天皇即位以後の、仁和元年（八八五）、二年（八八六）、三年、いずれかの年の梅の花の咲く季節であったことが知られる。

おなじひとにたまふ

四

山ざくら たちのみかくすはるがすみ
いつしかはれて見るよしもがな

【異同】○ひと 人（代）○たまふ 給ふ（代）○見る みる（代）

○集付 新勅（代）

【通釈】 同じ人に賜う歌。

春霞がひどく立ち、山桜を隠している。その霞が早く晴れて山桜が見たいものです。そなたと私を隔てる障害がなくなつて、早く会いたいものです。

【語釈】○おなじひと 三番歌の「更衣」に同じ。○たちのみかくす 春霞がひどく立ち、山桜を隠す。「のみ」は強調の副助詞。『古今和歌六帖』に「秋霧のたちのみかくす紅葉ばのおほつかなくてやみぬべらなり」（一・六四二）など。○いつしか 早く。『万葉集』に「うぐひすの なさちらすらむ 春の花 伊都思香きみと たをりかざさむ」（卷十七・三九六六）など。○見るよしもがな 見る術があればなあ。『古今集』に「おもふてふ人の心のくまごと」にたちかくれつつ見るよしもがな」（誹諧歌・一〇三八）など。

【他出】

○『新勅撰和歌集』春下冒頭歌・七三

みこにおはしましける時の御うた 光孝天皇御製

山ざくらたちのみかくすはるがすみいつしかはれて見るよしもがな
 【参考】「山桜」は、『古今集』の「やまざくらわが見にくれば春霞
 峰にもをにもたちかくしつづ」(春上・五二)のように「春霞」が隠
 すものと詠まれ、それゆえ、霞の間からほの見えた姿は、美しい女
 性の比喩として恋歌に「人の花つみしける所にまかりて、そこなり
 ける人のもとにのちよみてつかはしける つらゆき／山ざくら霞
 のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ」(恋一・四七九)
 などと詠まれる。四番歌も、恋しい山桜のようなそなたに早く会
 いたい、という意をこめる。

なお、『新勅撰和歌集』の詞書「みこにおはしましける時の御う
 た」は、定家が『仁和御集』では恋歌だった四番歌を四季歌として
 春下の巻頭に置くために入集した時、家集一番歌の詞書をそのまま
 利用して記したのか。ただし、「おましましける」ではなく、「お
 はしましける」という本文になっている。一番歌の【参考】に記し
 たように、定家は貞応二年(一二三三)七月や嘉祿二年(一二三六)
 四月に書写した古今集には「仁和のみかどみこのおまし／ける
 時」とあり、当時は「おましましける」という本文を採用していた
 ことが知られる。しかし、『新勅撰和歌集』が奏覧される貞永元年
 (一二三三)年十月の時期には、「おましましける」から「おはしま

しける」という本文に落ち着いたということであろうか。冷泉家旧
 蔵穂久邇文庫蔵の定家手沢本とされる『新勅撰和歌集』には、【他
 出】の通りの本文となっているのである。また、かつて益田鈍翁
 (一八四七―一九三八)が愛蔵し、森川勘一郎編『夏かけ』(大正十五
 年)に収められ、小松茂美が『古筆学大成』で紹介した伝藤原公任
 筆仁和御集切は、書写年代が「天永三年(一一二二)前後」とされ、
 集付の「古」が「わずか一字ながら、これは明らかに藤原定家(一
 一六二―一二四二)の手にまぎれもない」として「冊子本状態(原
 形)を保っていた当時、定家手沢本として定家の書庫に秘蔵されて
 いたもの」とされるが、その本文は「みこにおはしましけるとき」
 で、「おましましける」ではない。この本文こそが『新勅撰和歌集』
 の詞書「みこにおはしましける時の御うた」となったのであろう。

あかつきにおきたる下の曹司に 「七才
 たまはせける

五 あきなれば はぎのゝもせに置露の
 ひるまにさへもこひしかりけり

【異同】○あかつきに あかつき(代)○たまはせける たまひけ
 るに(代)○あき 秋(代)○、野(代)○置 をく(代)○こひ
 恋(代)○集付 風(代)

【通釈】 暁に起きて別れてきた後のいらっしやる職の曹司に

お与えになった歌

秋なので、萩の咲く野原に、露がおりていました。夜だけではなく、その露が乾く昼の間までもそなたが恋しいことです。

【語釈】○あかつきにおきたる「晁」は男女が別れる時間帯で、「起き」は共寝の状態から男が起き上がり、女の部屋を出ることをいう。五番歌は、後朝（衣衣）の歌ということになる。○下の曹司他に用例を見ない。あるいは「下の」は、もともと「しきの」だった本文が「き（支）」を「た（多）」と誤写されてきたものか。「しきの（職）曹司」は、中宮職の曹司（序舎、宿所）。後の仮御所として利用された。『円融院御集』に「霜月に内裏やけて、しきの曹司におはしましけるに、雪いたうふりければ、おなじ宮に／物おもへば雪のふるこそかなしけれかつはさえぬる世とはしるしる」（三三三）など。○のもせ 野原。『宰相中将君達春秋歌合』に「ただにてもあるべきものをまけぬとやのもせにむしのかくはなくらん」（七）など。○ひるまにさへも「干る間（乾く間）」と「昼間」の掛詞。「さへ」は添加の副助詞。夜間だけでなく、昼間までも。『古今集』に「みつしほの流れひるまをあひがたみみるめの浦によるをこそまで」（恋三・六六五、清原ふかやぶ）など。

【他出】

○『万代和歌集』恋三・二三四
人にたまはせける 仁和御製

あきなればはぎののもせにおくつゆの

ひるまにさへもこひしきやなぞ

○『風雅和歌集』恋四・二二八三

人に給はせける 光孝天皇御歌

秋なればはぎの野もせにおく露のひるまにさへも恋しきやなぞ

【参考】『拾遺集』に「本院の五の君の許にはじめてまかりて、あしたに／あさまだき露わけきつる衣手のひるまばかりにこひしきやなぞ」（恋二・七二〇、平行時）という一首があり、本歌と同想。この一首が光孝天皇の孫である源宗于の家集に増補され、それが何らかの経緯で、光孝天皇の本歌の結句に影響を及ぼし、『万代和歌集』や『風雅和歌集』の「こひしきやなぞ」という本文になったのである。「こひしきやなぞ」という句は、『古今和歌六帖』に「たま川にさらすてづくりさらさらにもかしのいもがこひしきやなぞ」（五・三五三八）、「みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人のこひしきやなぞ」（六・三八一七）などに見える。これらは、それぞれ『万葉集』の「多麻河泊にさらすてづくりさらさらになにぞこの児のここだかなしき」（巻十四・三三七三）、『古今集』の「みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ」（恋四冒頭歌・六七七）に表現された恋心を、その感情の由来を問う形に言い換えられている。一度吐露された恋心をもう一度その由来を問い直すことが十世紀半ばに流行し、その常套句が「恋しきやなぞ」だったらしい。本歌の場合も、「こひしかりけり」の本文が古

く、「こひしきやなぞ」は後の本文であろう。

おなじ人にたまはせたる

六 千早振神のみかはのつりびとに

あらぬわれさへぬれまさりけり

【異同】○千早振 ちはやぶる(代)○びと 人(代)○ぬれまさりけり ぬれまさるかな(代)

【通釈】 同じ人にお与えになった歌

神聖な川の釣人ではない私までも、(そなたのことが恋しくて涙で)一段と袖が濡れることです。

【語釈】 ○おなじ人 五番歌の詞書に見える職の曹司にいる后。○

千早振 「神」を導く枕詞。『万葉集』に「千早振 神のたもてる

命をも 誰が為にかは 長く欲りする」(巻巻十一・二四一六)など。

○神のみかは 他に用例を見ない。神聖な川か。あるいは「賀茂の

み川」か。【参考】参照。○つりびと 魚を釣る人。「つり(釣)」

は『万葉集』にも見えるが、「つり人」という語は、他の平安時代

の歌集に見えない。平安時代にはまだ歌語として一般的でなかった

らしい。○われさへ 水飛沫で袖を濡らす釣人だけではなく、私ま

でも。「さへ」は添加の副助詞。『陽成院一親王妃君達歌合』に「さ

よふかくこひするしかのこゑさけばわれさへあやなそでのひつか

な」(四)など。○ぬれまさりけり 一段と濡れる。ますます濡れ

る。川の水で濡れるように、涙で袖が濡れるのである。『土佐日記』

に「ゆくひととまとまるもそでのなみだがはみぎはのみこそぬれまさりけれ」(九)など。その涙は恋しくて流れるのである。『本院侍従集』に「うかびても袂のみこそぬれまされ我もねられず君こふるよは」(二九)など。

【他出】 ナシ

【参考】『夫木和歌抄』に「かも川、山しろ／御集 延喜御製／かも川のかもの河せのつり人にあらぬわが身もぬれまさりけり／家集

順／ちはやぶるかも川霧きるなかにしるきはすれる衣なりけり」

(二〇九八三・一〇九八四)などあり、本歌の初句・二句は「ちは

やぶるかものみかはの」だった可能性があらう。『古今集』に「ち

はやぶるかももの社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし」(恋

一・四八七)、『拾遺集』に「賀茂臨時祭の使にたちてのあしたに、

かざしの花にさして左大臣の北の方のもとにいひつかはしける 兵

衛／ちはやぶるかも河辺のふちなみはかけてわするる時のなきか

な」(雑恋・一三三五)などと、枕詞「ちはやぶる」が「賀茂」を導

く例が見える。

底本の結句は「ぬれまさりけり」だが、代々御集の本文では「ぬれまさるかな」となっている。『新編国歌大観』によって平安和歌の用例数を挙げると、「ぬれまさりけり」が十三例で、「ぬれまさるかな」が八例。「ぬれまさりけり」がやや優勢。「けり」は発見の詠嘆で、釣り人でない私まで、釣り人以上に袖が濡れるものだったの

だ、と初めて気づき、驚く気持ちを表現する。それに対して、「かな」は感動の終助詞で、『うつほ物語』に「あやしくもぬれまざるかなかすが野のみかさの山はさしてゆけども」(藤原の君・三二二)「衣手もほさで過ぎぬる夏の日ををしむにさへもぬれまざるかな」(祭の使・二九二)のように、「…も〜かな」と用いられる例が目立つ。

七 夏草はしげりにけれど ほとゝぎす 「七ウ

などわがやどにひとこゑもせぬ

【異同】 ○わが 我(代) ○ひとこゑ 一声(代) ○頭注 新古ノ延喜御哥とあり如何(代)

【通釈】 夏草は、繁るようになったけれども、ホトトギスは、なぜ我が家で一声も鳴かないのか。(私の恋心はこんなに激しく募るのに、どうしてそなたは私の所へ来て声を聞かせてくれないのですか)

【語釈】 ○夏草 夏の草。夏になって繁茂する草。『万葉集』に「夏草之茂者雖在 今日之楽者」(巻九・一七五三)など。○しげりにけれど 繁る状態になったけれど。「に」は、状態の発生を表す完了の助動詞「ぬ」の連用形。『元真集』に「なつくさはしげりにけりなたまほこのみちゆき人もむすぶばかりに」(九四)など。○ほとゝぎす 本歌も六番歌の前に記された詞書「おなじ人にたまは

せたる」を受けると見れば、ホトトギスは恋人の比喩ということになる。『元良親王集』に「ただしはしにてたえ給ひにける人に、ほどへて御文つかはしたりければ／おとづれてほどふるやどのほととぎすなくひとこゑのめづらしきかな」(九〇)など。となれば、「夏草はしげりにけれど」も、単に「夏になったのに」というだけではなく、募る恋心の比喩表現と読めよう。『古今集』に「わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」(恋二・五六〇、小野良樹)など。○など なぜ。どうして。『万葉集』に「ふぢなみの しげりはすぎぬ あしひきの 夜麻保登等芸須 奈騰可伎奈賀奴」(巻十九・四二二〇)など。○ひとこゑ 一声。『万葉集』の「恨雀公鳥不喧歌一首／家にゆきて なにをか語りむ あしひきの山雀公鳥 一音もなけ」(巻十九・四二〇三、久米朝臣繼麿)と、その異伝『拾遺集』の「夏山をこゆとて／家に来てなにをかたらむあしひきの山郭公ひとこゑもがな」(夏・九七、久米広繩)など。

【他出】

○『新古今和歌集』夏・一八九

題しらず 延喜御歌

なつくさはしげりにけれど郭公など我がやどにひとこゑもせぬ

○『定家十体』二二三一、えむぎ

なつくさはしげりにけれどほととぎす

などわがやどにおとづれもせぬ

【参考】 代々御集の頭注「新古ノ延喜御哥とあり如何」は、『新古今

『集』において作者が「延喜御歌」となっている本歌が『仁和御集』に入っていることに不審を表明したものの、『定家十体』にも「えむぎ」（延喜）とあり、定家は醍醐天皇御製と考えていたらしい。本集六番歌【参考】に挙げた『夫木和歌抄』一〇九八三番歌にも「御集 延喜御製」とあり、『仁和御集』と『延喜御集』とが混同されていた時期があつたのであろう。

八 あはずしてふるころをひのあまたあれば

はかなきそらにながめをぞする

【異同】○ころをひ ころおひ（代）○そら 空（代）○集付 新古（代）

【通釈】長雨が降り続き、そなたと逢わないで過ごす時間がたくさんあるので、むなししい空を眺めて物思いばかりをしていることです。

【語釈】○あはずして 恋人と逢わないで。『古今集』に「あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ」（恋三・六二四、源むねゆきの朝臣）など。○ふる 「経る」と「降る」の掛詞。『古今集』に「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（春下・一三三、小野小町）など。○ころをひ ころ。とき。『忠岑集』に「はなもみちも ちりはてて 心すこかる ころほひに」（八七）など。○あまたあれば たくさんあるの

で。『古今集』に「ほととぎすななくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」（夏・一四七）など。○ながめをぞする 物思いをすることだ。「ながめ」（物思い）に「長雨」を掛ける。書陵部藏御所本（五二〇・一二二）『躬恒集』に「あひおもはぬ花に心をつけそめて春の山べにながめをぞする」（六〇）など。

【他出】

○『新古今和歌集』恋五・一四一三

題しらず 光孝天皇御歌

あはずしてふるころほひのあまたあれば

はるけき空にながめをぞする

○『定家八代抄』恋三・一二九、光孝天皇御製

あはずしてふる比ほひのあまたあればはるけき空の詠めをぞする

○『新時代不同歌合』四四、光孝天皇

あはずしてふるころほひのあまたあれば

はるけき空にながめをぞする

【参考】「はかなき空」が『新古今集』以降「はるけき空」と変わってしまふ。「はかなき空」は、期待外れで、頼りない、心細い空。「はるけき空」は、空間的・時間的・心理的に遠く隔たっている空。それぞれの用例を調査すると、「はるけき空」は『新古今集』が初例で平安和歌には用例がないことが知られる。一方、「はかなき空」は平安和歌に次のような用例がある。『伊勢集』に「秋野花見行くときくをとこ／あきののいでぬとならばはなすすきしのびにわれ

をまねきやはせぬ／かへし／いづかたにありときかはか花すすきは
 かなきそらをまねきたてらん（四五・四六）とあり、返歌は浮かれ
 歩く男を皮肉り、「たしかなあてもない」という意を込めて「はか
 なき空」という。また、『公任集』にも「御ともの人の雨ふりぬべ
 しときこえければ／秋の夜の雨にもなにかいそぐべき此比ふると思
 ひなしつつ／返し／雨ならではかなき空にふる人も露にもぬる物
 とこそきけ」（三九一・三九二）と見え、雨の縁語で「空」といい、
 「降る」と「経る」の掛詞を用い、「はかなき」無常な世に生きてい
 る人は、雨ばかりか露に無常に感じて涙で濡れると詠まれている。
 さらに、『朝忠集』の「ひとしれぬなかの女、をとこのつかさえて
 くだるに、をとこあはれと思ひて／たぐへやるわがたましひをいか
 にしてはかなきそらにゆきまどふらん」（二〇）は、『大和物語』第
 六段において「朝忠の中將、人の妻にありける人にしひびて逢ひわ
 たりけるを、女も思ひかはして、かよひすみけるほどに、かの男、
 人の国の守になりて下りければ、これもかれもいとあはれと思ひけ
 り。さて、詠みてやりける／たぐへやるわがたましひをいかにして
 はかなきそらにもてはなるらむ／となん、下りける日いいやりけ
 る」と歌物語化されている。朝忠詠の結句は異なるが、夫と共に地
 方へ下向する女に、自分の魂を連れ添わせるが、あてどなく、すが
 ることもできない心細さを「はかなき空」と表現する点は変わらな
 い。しかし、中世の勅撰和歌集『新千載集』に同歌が入集した時、
 「いとしのびてかよひける女のをとこ受領になりてくだりければか

の女もまかりけるに申しつかはしける 謙徳公／たぐへやる我がた
 ましひをいかにしてはるけき空にもてはなるらん」（離別・七四〇）
 と、同じく好き者の伊尹と勘違いされると同時に、「はかなき空」
 は「はるけき空」と物理的な距離感に重点が置かれた表現に変わっ
 てしまうのである。

九 やまがはのはやくもいまはおもへども

ながれてうきはわが身なりけり

【異同】○やまがは やま川（代）山がは（西）○いまは いまも
 （代・西）○わが身 ちぎり（代）わがみ（西）○集付 新勅（代）
 勅／延喜（西）

【通釈】 もうすでに今は過去のことと思っているけれども、山川の
 速い流れのように、時が過ぎてもやはり、自然と泣かれて
 つらいのは、我が身なのであった。

【語釈】○やまがはの 山川の流れの状態から「おと」「はやく」な
 どを導く枕詞。西本願寺本『躬恒集』に「おとにきくいせのすずか
 のやまかはのはやくよりわがこひわたるきみ」（二五七）など。○は
 やくもいまは もうすでに今は。代々御集・伝西行筆切の本文「は
 やくもいまも」で、昔も今も、の意。ただし、「はやくもいまも」
 「はやくもいまは」共に他に用例がない。○おもへども 文脈から、
 過去のことと思っているけれども、の意となろう。『古今集』に

「おもへども人めづつみのたかければ河と見ながらえこそわたらね」(恋三・六五九)など。○ながれて「流れて」と「泣かれて」の掛詞。『古今集』に「冬河のうへはこほれる我なれやしたにながれてこひわたるらむ」(恋二・五九一、むねをかのおほより)など。○うき「憂き」に「浮き」が響く。『古今集』に「水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまるかな」(恋五・七九二、とものり)など。○わが身 代々御集の本文「ちぎり」。いずれも解し得る。ただし、「うきちぎり」という表現は用例が見られない。それに対して、「うきわが身」は、『紫式部集』に「すめるいけのそこまでてらすかがりびのまばゆきまでもうきわが身かな」(六七)など。

【他出】

○『新勅撰和歌集』恋五・一〇一八

題しらず 光孝天皇御製

山河のはやくもいまもおもへどもながれてうきはちぎりなりけり

【参考】『新勅撰和歌集』の本文が「いまも」「ちぎり」であるので、定家が見た『仁和御集』は代々御集の系統の本文だったのだろうか。「いまも」「わがみ」の本文をもつ伝西行筆切には、「定家の筆跡」(出光美術館図録解説)とされる集付が歌頭にあるので、あるいは、定家が本歌を『新勅撰和歌集』に入れる時に、「わがみ」を「ちぎり」に書き換えたか。父俊成の家集『長秋詠藻』には「遇不逢恋／よそならばさてもやみなんうき物はなれてもつらき契なりけり」(下・五二七)なども見え、契りを怨む恋歌と読んだのかもしれない。

ない。それが代々御集の本文に影響を与えた可能性もあろう。

なお、伝西行筆切には、九番歌と一〇番歌の間に「延喜」という書き入れがある。延喜の帝、醍醐天皇の詠歌であることを示す作者表記だが、九番歌にしても、一〇番歌にしても、定家自身がそれぞれ『新勅撰集』『新古今集』に「光孝天皇御製」として入集しているので、定家筆とされる書き入れだが、不審である。書き入れの位置は、一〇番歌により近く、その右肩に付けられているように見えるが、一一番歌にも「新／延喜」の頭注があり、集付／作者表記の順と考えて、この「延喜」は九番歌に対して記されたものと見ておく。一一番歌も、『新古今集』の光孝天皇御製であり、「延喜」は不審。七番歌の【参考】に記したように、「仁和御集」と『延喜御集』とが混乱していた時期があるのだろう。

一〇 なみたかみ榜出ぬあまのつりざほの

ながきよな、こひつゝぞぬる 「八才

【異同】○たかみ たかみ(不審)(代)○榜出ぬ こぎいぬ(不審)(代)こぎてし

(西)○ざほ 棹(代)○よな、よな(代・西)○集付 新古(代)新(西)

【通釈】 浪が高いので漁に漕ぎ出さない漁船の漁師の持つ釣竿のよ
うに長い、長い夜を毎夜毎夜そなたのことを恋しく慕い続
けて寝ることです。

【語釈】○なみたかみ 浪が高いので。『万葉集』に「わぎもこが
かたみに見むを 印南つま 之良奈美多加弥 よそにかもみむ」
(巻十五・三五九六)など。○榜出ぬ 「こぎいでぬ」と読むのであろ
う。初句「浪高み」を受けると、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連
体形。「あま」を修飾し、漁に漕ぎ出さない漁船の、の意。『古今
集』の「おきのくにながされける時に舟にのりていでたつとて、
京なる人のもとにつかはしける 小野たかむらの朝臣／わたのはら
やそしまかけてこぎいでぬ」と人にはつけよあまのつり舟(鵜旅・四
〇七)の影響で、完了の助動詞「ぬ」を用いる「こぎいでぬ」の用
例がほとんどで、打消の「ぬ」を伴う用例は珍しい。○あまのつり
ぎをの 漁師の持つ釣竿のように。「あまの」の「の」は連体格、
「つりぎをの」の「の」は比喩の格助詞。「さしはへて」「ながき」
などを導く序詞。釣竿は多く竹製であったので、「長き夜」の「よ」
に竹の「よ(節と節の間の中空の部分)」も響く。「あまのつりぎを」
の用例は、『能宣集』に「れいかよひはべりけるところにまかりた
るに、ほかへまかりにければ、たづねてつかはす／いさりするあま
のつりぎをさしはへてたのむかひなきめをもみるかな」(二二三)、
『夫木和歌抄』に「おもふかたのいせをのあまのつりぎをのながき
よあかずぬるる袖かな」(一六六五八、後鳥羽院)など。○よな、
夜ごと。毎夜毎夜。『古今集』に「うき事を思ひつらねてかりが
ねのなきこそわたれ秋のよなよな」(秋上・二二三、みつね)など。
○こひつ、ぞぬる ずっと恋しく思い続けて寝ることだ。『万葉集』

に「妹が袖 別れし日より 白たへの 衣片敷き 恋管首寐留」
(巻十一・二六〇八)など。「つつ」は継続を表す接続助詞。

【他出】

○『新古今和歌集』恋五・一三五六

題しらず 光孝天皇御歌

なみだのみうきいづるあまのつりぎをの

ながきよすがらこひつつぞぬる

○『定家八代抄』恋三・一一二二、光孝天皇御製

涙のみうき出づるあまの釣ぎをのながき夜すがら恋ひつつぞぬる

【参考】『新古今集』や『定家八代抄』では、歌の前半に「涙のみ浮
き出づる」と大きな本文異同がある。この点が代々御集の本文に
「不審」という傍注が付けられている理由であろうが、『仁和御集』
の諸本も「榜出ぬ」「こぎいぬ」「こぎてし」と本文がバラバラであ
るといふ事情もある。『新古今集』撰者の一人、定家が「こぎいで
ぬ」という本文をもし見ていたとしたら、「榜出ぬ」の【語釈】に
指摘したように、『古今集』の小野篁詠「わたのはらやそしまかけ
てこぎいでぬ」と人にはつけよあまのつり舟」によって、先ずは完了
の助動詞「ぬ」と見て「漕ぎ出した」と解したのであろう。とする
と、初句の「浪高み」は不審だっただろう。あるいはまた、「こぎ
いでぬ」の箇所本文が乱れていることを確認していたとしたら、
下の句の「長き夜…恋ひつつぞ寝る」という表現に注目し、「なみ
た…」と初句を読みはじめた時「涙」を連想したとしても何ら不

「議はないだろう。そうした背景のもとで、「なみたかみ」の「可」が「の（乃）」と誤写されて「なみだのみ」となり、「こき出ぬ」も、「こ（巳）」が「う（牟）」、「ぬ（奴）」が「る（留）」と誤写されるなど、やがて「うき出る」（浮きいづる）という本文が形成されていったのであろう。

また「夜な夜な」が「夜すがら」に替えられた理由は何か。「夜な夜な」は、毎夜毎夜。「夜すがら」は、夜の間ずっと、夜通し。それぞれ反復と継続と、多少ニュアンスが異なる。「長き」という修飾語と自然に結びつくのは「夜すがら」であろう。「長き夜な夜な」も他に用例がないわけではないが、長歌に二例あるに過ぎない。それに対して、「長き夜すがら」は、『本院侍従集』の「忍びつつながきよすがら恋ひわびて涙の淵とうかびてぞふる」（一七）をはじめ、平安和歌に十四例。『後拾遺集』の秋上冒頭歌も「永承四年内裏歌合に攝衣をよみはべりける 中納言資綱／からころもながきよすがらうつこゑにわれさへねでもあかしつるかな」（秋上・三三五）であった。定家はそうしたニュアンスの相異を鋭く感じ取り、「夜な夜な」から「夜すがら」へ本文を替えたのであろう。

更衣ひさしくまいらぬに、御文

たまはせけるに

一一 君がせぬわがたまくらは草なれや

なみだのつゆのよなくにをく

おほむかへし

一一 露ばかりをくらむそではたのまれず

なみだのかはのたぎつせなれば

【異同】○更衣 ナシ（西）○ひさしく ひさしう（西）○御文 御ふみ（代・西）○たまはせけるに 給はせけるに（代）つかはしたりけるに、かうい（西）○たまくら 手枕（代）○草 くさ（西）○つゆ 露（代）○をく おく（西）○集付 新古（代）新 延喜（西）○おほむかへし 御返し（西）○露ばかり つゆばかり（代）くさ許（寂）○をくらむそでは をくらん袖は（代）おくらむつゆは（寂）○かは 河（代）○たき 瀧（代）○集付 新古（代）

【通釈】 更衣が久しく参内しないので、帝が御手紙を

お与えになった時に

そなたがしない私の手枕は、草なのであろうか、涙の露が毎夜毎夜置くことです。

御返し

露が置く程度とかいう袖はあてにできません。お逢いできないつらさで、私の方は涙の川が滝のように奔流していますので。

【語釈】○更衣 三番歌の詞書に見える「更衣」に同じ女性か。○わがたまくら 「手枕」は腕を枕とすること。多く、男女が共寝をする折りに、相手の腕を枕とすることをいう。『万葉集』に「神亀

五年(七二八)戊辰大宰帥大伴卿思恋故人歌／愛人の纏てし敷たへ
 の吾手枕を纏人有らめや(卷三・四三八)、『古今集』に「秋ならで
 おく白露はねざめするわがた枕のしづくなりけり」(恋五・七五七)
 など。○草なれや 草なのであるうか。『万葉集』に「寄藻／塩滴
 者 入流磯之 草有哉 見らく少なく 恋ふらくのおほき」(卷七
 ・一三九四)、『古今集』に「わがこひはみ山がくれの草なれやしげ
 さまされどしる人のなき」(恋二・五六〇、をのよしき)など。○な
 みだのつゆ 涙の雫を、露に見立てていう語。『貫之集』に「天慶
 二年(九三九)さいさうの中将屏風の歌／野やどりせるたび人／霜
 がれの草枕には君こふる涙の露ぞ置きまさりける」(四五五)など。
 ○露ばかりをくらむそで 露が置く程度とかいう袖。ほんの露ぐら
 いしか涙で濡れないとかいう袖。「ばかり」は程度の副助詞。「ら
 む」は伝聞・婉曲の助動詞「らむ」の連体形。『後撰集』に「雨の
 ふる日、人につかはしける／雨ふれどふらねどぬるるわが袖のかか
 るおもひにかわかぬやなぞ／返し／露ばかりぬるらん袖のかわかぬ
 は君が思ひのほどやすくなき」(恋五・九七三、九七四)など。○た
 のまれず あてにできない。「れ」は可能的助動詞「る」の未然形。
 『古今集』に「むねをかのおほよりがこしよりまうできたりける時
 に、雪のふりけるを見ておのおもひはこのゆきのごとくなむつも
 れるといひけるをりよめる／君が思ひ雪とつもらはたのまれず春
 よりのちはあらじとおもへば／返し 宗岳大頼／君をのみ思ひこし
 ちのしら山はいつかは雪のきゆる時ある」(雑下・九七八、九七九)

など。○なみだのかは 涙が多く流れるさまを川にたとえてい
 う語。涙川。『古今集』に「はやくせに見るめおひせばわが袖の涙の
 河にうゑましものを」(恋二・五三二)など。○たぎつせなれば 滝
 の瀬なので。『古今集』に「しもついてもでらに人のわざしける日、
 真せい法しのだうしにていへりける事を歌によみてをのこまちが
 もとにつかはしける あべのきよゆきの朝臣／つつめども袖にたま
 らぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり／返し こまち／おろかなる涙
 ぞそでに玉はなす我はせきあへずたきつせなれば」(恋二・五五六、
 五五七)など。

【他出】

○『新古今和歌集』恋五・二三四九、一三五〇

ひさしうまゐらぬ人に 光孝天皇御歌

きみがせぬわがたまくらは草なれや涙のつゆのよなよなぞおく

御返し 読人しらす

露ばかりおくらむ袖はたのまれず涙の川のたきつせなれば

○『定家八代抄』恋四・二九二、二九三

女に遣しける 光孝天皇御製

君がせぬわが手枕は草なれや涙の露のよなよなぞおく

御返し よみ人しらす

露ばかりおくらむ袖はたのまれず涙の川のたきつせなれば

【参考】九番歌の【参考】に述べた通り、伝西行筆切の頭注「新／

延喜」は不審。『後撰集』に見える「ははのぶくにてさとに侍りけ

るに、せんだいの御ふみたまへりける御返ごととに 近江更衣／さみだれにぬれにし袖にいとどしくつゆおきそふる秋のわびしさ／御返し 延喜御製／おほかたも秋はわびしき時なれどつゆけがるらん袖をしぞ思ふ」（秋中・二七七、二七八）などが、「仁和御製」と「延喜御製」とを錯覚させる遠因になっている可能性もあるか。

また 御 「八ウ

一三 あとたえてこひしきときの

つれ／＼は 面影にこそ

はなれざりけれ

【異同】○また 御 又たまはる（代）○ときの 時の（代・寂）○

面影 おもかけ（代）思かけ（寂）○集付 続後（代）

【通釈】 また、帝が詠まれた歌

そなたからの音信が途絶えてそなたが恋しい時の所在なきのなかでは、そなたの姿が面影に浮かんで離れないことです。

【語釈】○あとたえて 音信も途絶えて。『後撰集』に「式部卿あつみのみこしのびてかよふ所侍りけるを、のちのちたえだえになり侍りければ、いもうとの前斎宮のみこのもとよりこのごろはいかにぞとありければ、その返事にをんな／しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず」（冬・四七〇）など。○こひしきとき

の 恋しい時の。『古今集』に「ちりぬともかをだにのこせ梅花」ひしき時のおもひいでにせむ」（春上・四八）など。○つれ／＼はすることもなく所在ない時は。『中務内侍日記』に「つれづれはみるこちせよここにいまおほうち山のくれのけしきを」（一一五）など。○面影にこそはなれざりけれ 面影が浮んで離れないなあ。【面影】は、目の前にはないものが、あるように目の前に浮かぶこと。また、その姿。「けれ」は発見の詠嘆。『能因法師集』に「みちのくよりのほりたるむまのわづらひて、この国にてしぬるを見て／わかるれどあさかのぬまのこまなれば面影にこそはなれざりけれ」（二二〇）など。

【他出】

○『万代和歌集』恋五・二五五四

題しらず 仁和御製

あとたえてこひしきときのつれづれは

おもかけにこそはなれざりけれ

○『続後撰和歌集』恋三・八五一

人にたまはせける 光孝天皇御製

あとたえて恋しき時はつれづれとおもかけにこそはなれざりけれ【参考】「つれづれは」という表現をとる和歌は、同歌以外に三首あるのみ。一方、「つれづれと」という表現を含む和歌は、『後撰集』の「五月なが雨のころ、ひさしくたえ侍りにける女のもとにまかりたりければ、女／つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねは

なけれける」(夏・一八五)をはじめ、延べ二百例を数える。それゆえ、他出に挙げたように『続後撰集』では「恋しき時はつれづれ」との本文になったのであろうが、「つれづれ」と「離れざりけれ」はやはり不自然。「つれづれと」であれば、前田家藏明王院旧藏本『定頼集』に見える「つれづれとながむる比のこひしさはなぐさめがたき物にざりける」(二六八)などのような表現がふさわしい。

又こと更衣にたまはせたる

補1 よそにのみまつははかなき すみの江に

ゆきてさへこそ見まくほしけれ

【異同】○詞書 ナシ(寂)○まつは まつぞ(寂)○すみの江にすみのえの(ミセケチにして「に」と傍記)(寂)○ゆきてさへこそ行てのみこそ(寂)○集付 延喜(寂)

【通釈】 また、別な更衣にお与えになった歌

遠く離れて待つのは頼りないことです。松はすみの江に行つてまでも見たいといわれるように、自分の方から出かけて行つてまでも、あなたに逢いたいものです。

【語釈】○よそにのみ 遠く離れて。『古今集』に「よそにのみこひやわたらむしら山の雪見るべくもあらぬわが身は」(離別・三三三、躬恒)など。○まつははかなき 待つのは頼りない。伝寂然筆切の本文「まつぞはかなき」の方が二句で切れていることがはっきりす

る。「は(盤)」と「そ(曾)」の誤写。『後撰集』諸本では「定家本系統中、書写年代も旧く本文の秀れた」(松田武夫校訂、岩波文庫)とされる伝亀山天皇宸翰本は「まつぞかひなき」。『小大君集』に「はなすすきくもでに人にむすばれていつかとくるとまつぞはかなき」(二二三)など。後の「すみの江」との関係で「待つ」に「松」が掛けられている。○すみの江に「すみの江」は、松で有名な、摂津国の歌枕。『古今集』に「ひさしくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける」(恋五・七七八)など。「に」は、「ゆきて」に引かれて、「の」を改訂した本文か。伝寂然筆切にその過程が窺える。○さへこそ ほんとうに：までも。『後撰集』に「元良のみこのみそかにすみ侍りける、今こむとたのめてこずなりにければ 兵衛／ひとしれすまつにねられぬ震明の月にさへこそあざむかれけれ」(恋六・一〇三三)など。伝寂然筆切は「のみこそ」と強調の助詞を重ねる。しかし、既に初句に「のみ」が用いられていて、やはり添加の副助詞「さへ」と採用すべきであろう。○ゆきて：見まくほしけれ 出かけてゆき…逢いたい。『後撰集』に「別れるほどもへなくに白浪の立降りても見まくほしきか」(恋三・七三〇、つらゆき)など。

【他出】

○『後撰和歌集』恋二・六五三

長明のみこの母の更衣、さとに侍りけるにつかはしける

延喜御製

よそにのみ松ははかなき住の江のゆきてさへこそ見まくほしけれ
 ○『五代集歌枕』九五四

すみの江 撰津 醍醐天皇(注・ナカアキラノ親王女イ)
 よそにのみまつぞはかなきすみの江の
 ゆきてさへこそみまくほしけれ

【参考】本歌は、底本とした冷泉家本には無く、宮内庁書陵部蔵「代々御集」(五〇一・八四五)や伝寂然筆切には見える。他出に示したように、『後撰集』所収歌で「延喜御製」とされた歌なので、冷泉家本では削除されたのであろう。伝寂然筆切では、次の「ひさしくもなりにける哉」の頭注かと見える位置に「延喜」と記されている。この現象は、九番歌の【参考】に指摘したことと重なる。「延喜」の筆跡、さらに伝西行筆切と伝寂然筆切の集付に見える「勅」の文字の筆跡の共通性から、この二枚の切がツレであったことが確認できる。因みに、延喜の帝と呼ばれる醍醐天皇時代の「更衣」で、「長明親王」を産んだのは、藤原菅根女、淑姫よびめ。同母弟に兼明親王がいる。醍醐天皇崩御は延長八年(九三〇)九月二十九日。淑姫は天曆三年(九四九)九月に没す。

一四 ひさしくもなりにけるかな
 あきはぎのふるえのはなは

ちりすぎにけり 一 九オ

【異同】○かな 哉(寂)○あき 秋(寂)○はぎ 萩(代)○はな 花(代・寂)○すぎ 過(代)○集付 玉(代)

【通釈】なんと久しくなつてしまったことですねえ。その間に、秋萩の去年の古枝の花は、すっかり散つてなくなつてしまいました。

【語釈】○ひさしくもなりにけるかな なんと久しくなつてしまつたなあ。『古今集』に「ひさしくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける」(恋五・七七八)など。○あきはぎのふるえ 秋萩の去年の古い枝。『古今集』に「むかしあひしりて侍りける人の、秋ののにあひて物がたりしけるついでによめる／秋はぎのふるえにさける花見れば本の心はわすれざりけり」(秋上・二一九みつね)など。○ちりすぎにけり すっかり散つてなくなつてしまつたなあ。『万葉集』に「狭尾壯鹿乃 胸別尔可毛 秋芽子乃 散過スガヒナ 鶏類 盛サカリカ 可毛行流」(巻八・一五九九、家持)など。

【他出】

○『万代和歌集』秋上・八六〇

ひさしくもゐらざりける人にたまはせける 仁和御製

ひさしくもなりにけるかなあきはぎの

ふるえのはなもちりすくるまで

○『夫木和歌抄』四二二六

題不知、雲葉 光孝天皇御製

さびしくもなりにけるかな秋萩のふるえの花はちり過ぎにけり

○『玉葉和歌集』恋四・一六五二

ひさしくまゐらざりける人に 光孝天皇御製

ひさしくもなりにけるかな秋萩のふるえの花もちり過ぐるまで

【参考】「ちりすぎにけり」の語釈に挙げた万葉集の大伴家持詠は、秋萩がすっかり散ってしまったのは、雄鹿が胸で野の草木を掻き分けていくせいか、あるいは、盛りが過ぎたせいか、と季節の推移を詠み、本歌は、長い時間が経過する間に、秋萩の古枝の花はすっかり散ってなくなってしまうと詠嘆する。それに対して、『万代集』や『玉葉集』では、秋萩の花がすっかり散ってなくなってしまうまで、長い時間が経過してしまった、という説明の歌になり、倒置表現になっている。また、失われた『雲葉和歌集』の本文や、それを収めた『夫木抄』では、秋萩の古枝の花がすっかり散ってなくなってしまうことに「さびし」さを感じ取る歌と見て、「ひさ」を「さび」の誤写と考えたのであろうか。

近江更衣に

一五 春日山

あさゐる

雲の

風をいたみ 「一九ウ

猶予情

われは

もたら

じ 「一〇オ

【異同】○近江更衣に あふみのかうい(寂) ○歌 ナシ(寂) ○春日山 「集あさか」と傍記(代) ○猶予情 たゆたふ心(代) ○集付

続後拾/有奈良御門集如何(代)

【通釈】 近江更衣に

春日山に朝かかっている雲が、風が激しいので、ひと所にとどまらないで漂います。そのような、さだめなく揺れ動く心を私は持つまいと思えます。

【語釈】○近江更衣 醍醐天皇時代の更衣。父は右大弁源朝。周子。○近江御息所 「中将御息所」などと呼ばれ、時明親王・盛明親王・源高明・勤子内親王・郁子内親王・雅子内親王・源兼子の母。近江更衣に贈った歌とする詞書に従えば、一五番歌は醍醐天皇御製ということになる。他出に挙げた『続後拾遺集』の詞書と作者表記は、本集に拠ったもの。この一五番歌は、おそらく『奈良御集』からの増補。しかし、なぜ『近江更衣に』という詞書が記されたのか。伝寂然筆切では「あふみのかうい」の次の行には一六番歌「つきのうちのかつらのえだを思ふとや」が来ていて、「月のうちの桂の枝」が「近江更衣」の比喩であるとの傍注が本文化したかのようにも考えられ、その後、丁替わりか何らかの理由で、一五番歌が「近江更衣」と「月のうちの桂の枝を…」の間に追補された

か。○春日山あさるる雲の 春日山に朝かかっている雲。『万葉集』に「春日山 朝居雲乃 鬱 不知人尔毛 恋物香聞」（巻四・六七七）など。○風をいたみ 風が激しいので。「を」は間投助詞。「いた」は形容詞「いたし」（激しい）の語幹。「み」は原因・理由を示す接尾語。『万葉集』に「風乎疾 與津白浪 高有之 海人釣船 浜眷奴」（巻三・二九四）など。○猶予情 『万葉集』に「大船 猶預不定見者」（巻二・一九六、柿本人麿）とあり、後の「他出」を参照すれば、「たゆたふころ」と読むことが知られよう。あちらこちらとさだめなく揺れ動く心。『万葉集』に「浦触而 物莫念 天雲之 絶多不心 吾念莫国」（巻十一・二八二六）など。○われはもたらじ 私は、持つまいと思う。「もたら」は、持っている、の意のラ変動詞「持たり」の未然形。「じ」は、打消意志の助動詞「じ」の終止形。ただし、後の「他出」に示すように「我はしもたゞ」という本文もある。その場合、「しも」は強調の副助詞。「ただ」は副詞で、取り立てた事をしないで、そのまま、の意。副詞の修飾する動詞が省略された形。私はただ風に流され、為す術なく風が収まるのを待つばかり、という意になるか。「ただ」で終わる歌は、『増基法師集』に「わりなくも心ひとつをくだくかなよをへて岸にたつ浪はただ」（三九）、『千載和歌集』に「かかりける涙と人もみるばかりしほらじ袖よくちはてねた」（恋二・七〇七、雅兼）など。また、「ゝ」を「る」の誤写とし、「我はしもたる」「し」は強調の副助詞」という本文の想定も可能か。

【他出】

○『奈良御集』一一

春日山あさるるくもの風をいたみ たゆたふころ 我はしもたゞ
○『続後拾遺和歌集』恋一・六九四 一三二六年成立。

近江更衣にたまはせける 光孝天皇御製

浅香山あさるる雲の風をいたみ たゆたふ心我はもたらじ

【参考】「たゆたふ」は、『万葉集』に「大海尔 嶋毛不在 海原

絶塔浪尔 立有白雲」（巻七・一〇八九）「大船乃 絶多経海尔 重石

下 何如為鴨 吾恋将止」（巻十一・二七三八）「家尔底母 多由多敷

命 浪乃字倍尔 思之乎礼波 於久香之良受母」（巻十七・三八九

六）など見える。また、『続後拾遺和歌集』では「春日山」が

「浅香山」に置き換えられているが、『万葉集』に「安積香山 影副

所見 山井之 浅心乎 吾念莫国」（巻十六・三八〇七）と見え、

『古今和歌六帖』に「あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは

人をおもふものかは」（二・九八五）と見えるように、「あさか山」

は音の連想で「あさ（浅・朝）」を導く歌枕として「春日山」よりも

相応しいと考えられたのであろう。

或本

題しらず

新勅

補2 月のうちのかつらの枝をおもふとや

涙のしぐれふる心地する

【異同】○或本・題しらず ナシ(寂)○新勅 勅(寂)○月 つき(寂)○枝 えだ(寂)○おもふ 思ふ(寂)○涙 なみだ(寂)○新勅 勅(寂)

【通釈】 題知らず

月のなかの桂の枝(手の届かないあの女性^{おんな})を思ふと、それが理由か、涙の時雨が降る心地がすることです。

【語釈】○月のうちのかつらの枝を 月のなかの桂の木の枝を。古代中国人は月に桂の木があると想像していた(『初学記』天部・月)。手の届かない女性の比喩。『万葉集』に「湯原王贈娘子歌／目には見て 手には取らへぬ 月内之 楓如 妹をいかにせむ」(巻四・六三三)、『古今和歌六帖』に「かつら／目にはみててにはとられぬ月の内のかつらのごときいにもあるかな」(六・四二八八)、『伊勢物語』第七十三段に「昔、そこにはありとは聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける／目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける」など。月が照り輝くのは、月の桂の枝が黄葉していると考へた。『万葉集』に「黄葉する時に成るらし 月人 楓枝乃 色付く見れば」(巻十・二二〇二)など。○おもふとや 思ふと、それが理由か。『伊勢集』に「月のうちにかつらの人をおもふとやあめになみだのそひてふるらん」(二二)など。○涙のしぐれふる心地する 涙の時雨が降る心地が

することだ。『貫之集』に「京極中納言(兼輔)うせ給ひて後、あはたにすむ所有りける、そこにゆきて松と竹とあるをみて／松もみな竹もわかれをおもへばや涙の時雨ふる心ちする」(七九二)など。

【他出】

○『新勅撰和歌集』恋五・九五二

題しらず 光孝天皇御製

月のうちのかつらの枝をおもふとやなみだのしぐれふる心地する

【参考】本歌は、底本とした冷泉家本には無く、宮内庁書陵部蔵「代々御集」(五〇一・八四五)や伝寂然筆切には見える。

「おもふとや」の【語釈】に挙げた『伊勢集』二二番歌は「月のうちの桂の…を思ふとや…涙の…降る」と表現が本歌に極めて近い。しかし、『伊勢集』の詞書によると、宇多天皇の御子を生んだ伊勢が、その御子を桂の里に残して、また温子のもとに女房として戻り、桂の里に残してきた御子のことを思つて沈みがちであったのを、温子が慰めた歌である。「桂の人を思ふとや雨に涙の添ひて降るらん」の「らん」に、伊勢の心内を推量する温子の優しさが感じられる歌になっている。天理図書館蔵定家筆本『伊勢集』では第三句が「こふとてや」。それに対して、『仁和御集』や『新勅撰集』では、「涙の時雨降る心地する」と光孝天皇自身の恋心の表明の歌と読むことになろう。両歌の類歌性は極めて高いが、定家は、その関係性を追求することなく、それぞれ別の歌として認めていたようである。